

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.828 2023

2023年7月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

核兵器廃絶へ—YMCAへ期待すること—

広島県原爆被害者団体協議会 理事長 佐久間 邦彦

原爆が投下されたとき、私は生後9カ月でした。当時の記憶はまったくないのですが、10歳のころから原因不明の腎臓病や肝臓病を患い、後に被爆者と呼ばれるようになりました。被爆者に対してはさまざまな偏見もあったので、私は苦痛でした。12歳で亡くなられ「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんと年齢も近く、不安もありました。

高校生のとき、広島YMCAの学習塾に通いました。YMCAには塾だけでなくたくさんのサークルがあり、私はコーラス部に入部。コーラス以外にも、街頭募金活動をしたり、平和問題を語り合ったり。キャンプにも行きました。いろんな学校の生徒と、自由に意見を言い合って交流したことは本当に楽しい経験でした。学力によらず一人ひとりが尊重されて平等で、自由で、「民主的とはこういうことだ」と学びました。ちょうど広島YMCAがホノルルYMCAと交流を始めた年でもあり、世界の人たちと仲良くする大切さも教えられました。

20歳になった1964年、どうしても「被爆者」という重圧から逃れたくて上京し、東京YMCAホテル専門学校に入学しました。東京オリンピックにも関わり、就職もして、結婚したいと思う人も見つかったのですが、彼女のご両親が広島の人と交際することを良く思わなかったため断念。やはり私は被爆を背負って生きていくしかないと思って、広島に帰りました。

定年後、広島県原爆被害者団体協議会でボランティアを始め、今に至ります。核兵器は人の一生に対して大きな障壁を作ってしまう、内面まで変えてしまう非人道的な存在です。こんな経験は二度と誰にもさせてはならない、というのが被爆者の思いです。

5月に広島で開催されたG7では、各国首脳が原爆資料館を見学し、被爆者の話を聴かれました。首脳たちの感想には、核兵器の悲惨さが書かれていましたが、だからなくそうとはなりません。「日本もアメリカの核の傘下で守られている。核兵器は必要だ」「核兵器がないと安全は守れない」と考える人が多くいます。でも、もう一つの考え方があります。話し合いで解決を目指す考え方です。これは私がYMCAで学んだことです。考え方の違う相手とも話し合う。交流して理解し合う。戦争はしない。YMCAの精神にあるのはそういうことだと思います。

2017年に私はハワイの真珠湾に行って、ミズーリ号に乗っていた人の話を聴きました。その方は「お互いにやりたくて戦争をしていたわけではない。軍の命令に従わなければならなかっただけだ」と言いました。戦争をしたいと思っている人は少ない。戦争はしたくないと皆が声をあげることができれば、戦争は回避できると私は信じています。だからこそ、一人ひとりの意見が尊重され、自由に話し合うことのできる民主的な社会を作ること。戦争に異を唱えられる若者を育てることが肝心です。

核兵器は人類にとって、あってはならないものです。核兵器反対の声をあげることが、政治運動でも何でもありません。政治的に利用しているのは為政者の方です。一人ひとりが声をあげていけば、核兵器はなくなることができる。若い方々にはそう伝えたいです。

（まとめ 編集部）



参加者
募集

広島YMCA インターナショナルユースピースセミナー

国内外の若者が広島に集まり、被爆証言を聞き、原爆資料館や慰霊碑を巡りながら、平和について共に学び、語り合い、絆を深めます。

■8月4日（金）～8月7日（月） 全国から参加者を募集しています。

<https://www.ymcaedu.org/>



第54回全国YMCAリーダー研修会 倉敷市で100人参加

「第54回全国YMCAリーダー研修会」が5月4～6日、岡山県の倉敷市自然の家で開催され、全国YMCAのユースリーダー約100人が集いました。今年のテーマは「Youth must go on ～見えていないものがほらそこに」。講演やワークショップのほか、キャンプファイアやプロジェクトアドベンチャーなどさまざまなアクティビティをとおして、「普段気づくことのない何かを見つける3日間」を体験しました。

参加者の大半が、コロナ禍で学生生活を送ってきた大学3～4年生だったこともあり、参加後の感想には「肩を組んでひとつの輪になったことに感動した」「同じ時間、空間を共有できて満足した」など、対面による出会いを喜ぶ声が多く寄せられました。楽しかった活動の1位にも「キャンプソングナイト」があがるなど、共に歌う機会すら制限されてきた学生たちにとって、貴重な研修会になりました。主管はYMCAせとうち・姫路YMCA。初めて主管したという両YMCAは、10人のリーダーによる実行委員会を組織し、2度にわたる事前研修もして準備にあたりました。



実行委員長の中名桃子さん (YMCAせとうち) にお話を聞きました。

* * *

私たち実行委員は12月から20回にわたって実行委員会を開いて準備をしてきました。まずはテーマを決めるため、「私たち若者に必要なことは何だろう」と、自分たちを振り返るところから始めました。コロナ禍で人と接する機会が少なかった私たちは、自分の中に感情をため込んだままネガティブになりやすい。積極的に意見が言えず、受け身になりやすい。でも、これからの社会をつくっていくのは若者で、意見をちゃんと伝えなければ社会はよくなっていかないのではないか。そんな長い話し合いの中で見つけたキーワードは「自分から」でした。常に前を向いて、自分から一歩踏み出していくこと。研修会という非日常の中で何

かを見つけ、日常の自分を後押しできる時間になればと考えました。

研修中は、大会テーマ「Youth must go on (若者は進み続ける)」の具体的な取り組みとしてマップ作りを行い、各グループで「自分たちはどんな社会を目指したいか」を考え、3日目に発表しました。「個人の成長が世界の平和につながっていくこと」を表現したグループや、一人ひとりの個性が尊重される“七色の社会”を目指して列車が旅する寸劇を披露したグループなど、YMCAのブランドビジョンも反映させながら、素晴らしい発表がされました。終了後のアンケートにも、「会ったこともない人と話し合っただけの一つの意見にまとめていく。貴重な経験だった」など、たくさんの嬉しい感想が寄せられました。私自身もたくさんの人とつながりができて、成長できたと実感しています。

ウクライナから日本へ

—— 長期化する避難生活で ——

昨年に引き続き日本YMCA同盟は、東京都と協定を結び、都内に住む避難者宅を訪問するなどしてニーズ調査を続けています。戦況の先行きが見えない中、心身の疲労をかかえる方々に、わずかでも前向きな気持ちになれる時を届けられればと、YMCAは各種のプログラムも提供しています。

>>> プログラミングを体験

日本YMCA同盟はアマゾン・ジャパン合同会社と協働で5月20日、プログラミング教室を開催。14人の小中学生が「Amazon Cyber Robotics Challenge (ACRC)」を体験しました。IT先進国といわれるウクライナの子供たちは、次々と課題をクリア。「難しかったけど楽しい」「もっとやりたい」と、元気な声があがりました。



>>> 「FC東京」サッカー観戦

東京都とFC東京からの招待で、20人の避難者が観戦しました。初めて観戦したリュボミールくん (11歳) は、ウクライナのFCシャフタル・ドネツクのユニフォームを着て来場。「応援が楽しかった。チームは負けてしまったけれど、勝ったのと同じくらいにうれしい!」と大興奮でした。



>>> 浴衣で浅草めぐり

本国の家族を案じながら子育ても仕事も一人で背負っている母親たちに、浅草で日本文化を体験してもらいました。初めての浴衣、人力車などに参加者からは「おとぎ話の中にいるような気分だった」「この1年半で一番いい日だった。自分でも驚くほどポジティブな気持ちになった」と喜びの声が寄せられました。



【モンゴルYMCA×茨城YMCA】 新規パートナーシップ締結 交流や研修で人を育てる

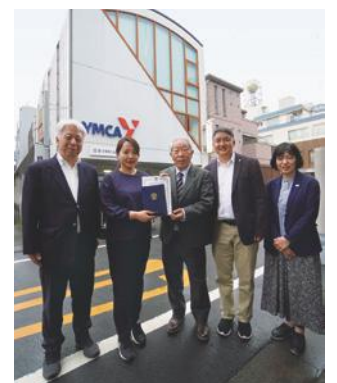
世界中から研究者が集まる国際都市つくば市。中でもモンゴルの研究者は家族連れが多く、茨城YMCAの活動にもよく参加され、そこからさまざまな交流が芽生えてきたことから、この度モンゴルYMCAとパートナーシップを締結することになりました。

茨城YMCAが本格的にモンゴルとの交流プログラムを始めたのは2018年。茨城YMCAで日本語を学んでいたノミン・エルデネさんの提案で、モンゴルで日本語を学習している小学生8人が来日し、観光やホームステイをして茨城の子どもたちと交流したことに始まります。このプログラムは「みらいへ グール(虹)プロジェクト」と名付けられ、日本とモンゴルを結ぶ虹となる子どもたちを育てようと、以後も毎年開催されています。

2022年10月には在日モンゴルの子どもたちを対象に「モンゴルこどものオルドン」を開設。日本で暮らしながらもモンゴルの言葉や文化を忘れないようにと、毎週約30人の子どもたちが通い、モンゴル語での勉強や遊びを楽しんでいます。

パートナーシップを締結するにあたり、5月19～28日にモンゴルYMCAの総主事・役員3人が来日し、茨城YMCAの会員総会に出席したほか、日本YMCA同盟や東京YMCAも訪れました。これからは子どもたちの交流活動だけでなく職員の長期研修も行うなどし、お互いの国で活躍できる人を育成していくことを目指していきます。

茨城YMCA 三好 陽之



日本YMCA同盟会館前で